

## [書評]

久野洋著『近代日本政治と犬養毅——一八九〇～一九一五』

(吉川弘文館, 2022年5月, A5判, 334頁, 9,500円 [本体])

長谷川 琢人

本書は、帝国議会開設後から第一次護憲運動にかけての日本政治について、野党勢力の領袖として活動した犬養毅に着目し、その活動を地方・中央を結びつけて描いたものであり、著者が2016年に大阪大学大学院に提出した博士論文をもとにした著作である。内容を紹介した上で、若干の論点を指摘してみたい。

### 一 本書の構成と内容

本書の構成は以下の通りである。

序章 課題と方法

第一部 犬養毅・進歩党系の地方基盤

第一章 明治中期における進歩党系勢力の地方基盤——犬養毅の選挙地盤を中心に

第二章 日露戦前における地方都市の政治状況——岡山市の場合

第三章 地域政党鶴鳴会の成立

第四章 立憲国民党の成立——犬養毅と坂本金弥の動向を中心に

第二部 犬養毅と政界再編への模索

第一章 日清戦後における犬養毅の貿易立国構想の形成

補章 日清戦後の対外硬派——大手倶楽部の動向を中心に

第二章 明治後期の政界再編と犬養毅

第三章 大正期「第三党」構想の形成——犬養毅・立憲国民党の地方基盤

終章 総括と展望

各部、各章の内容は以下の通りである。

序章において、「非政権政党の側に視点を置き、近代日本における複数政党制の形成を社会変動と関わらせて描きだす」(1頁)という本書の目的が示される。その目的のもと、犬養毅に着目するのは、「野党勢力の模索の過程」(1頁)を見ることができるためである。その上で、今までの犬養に関する研究との差は、「犬養の政治指導を選挙地盤、政治基盤との関わりを踏まえて描きだす」(1頁)、すなわち、地方政界と中央政界の双方の視点から犬養を捉える点である。その方法として、民力休養路線を分析基軸として活用す

ることが提示されている。

第一部では、明治期における岡山県の政治状況及び犬養毅の選挙地盤について、地方利益誘導路線と民力休養路線の関係性から説明がなされる。

第一章では、進歩党系は消極主義を唱えたため経済後進地域に基盤があるという先行研究<sup>①</sup>を受けて、経済先進地域における進歩党の勢力拡大過程が描かれる。

1890年代、岡山県南部は、繊維業中心の経済先進地域となり、北部は経済発展が遅れた。一方、1894年の第3回総選挙以降、徐々に進歩党系が県南、自由党系が県北に勢力を築いていく。以上のように、岡山県においては、先行研究とは逆の構図が形成されていると著者は指摘する。犬養は、1890年の第1回総選挙及び1892年の第2回総選挙では、地縁と中央での名声に加え、人的結びつきによって経済界からの支持を受け当選した。1893年前後に立憲改進黨が主導した輸出税全廃運動が地元経済界の支持を受けたため、犬養は中央での政治工作に集中できるようになり、1896年の第二次松方内閣、1898年の第一次大隈内閣成立に貢献した。

一方、1897年頃から県内では児島湾開墾が問題になっていた。地元住民は生活破壊であると批判し、県議は開墾決定プロセスが非立憲的だと批判した。両者は連合し、開墾反対運動は盛り上がった。この過程では、公共事業が生活を破壊するという論理が提示されており、民力休養論は「国益」に対し、「生活」問題を対置する論理ともなったと指摘されている。

第二章では、水道事業に着目して地方都市において民力休養路線が影響力を確保していく様子が描かれる。水道事業においては地域社会と政党と地元財界という三者の相互関係が見られるという先行研究<sup>②</sup>を前提に、岡山市の政治状況が描かれる。

岡山市は第六高等学校の誘致成功によって、水道事業の国庫補助を得ることができた。ところが、この水道事業をめぐる市会での勢力変動が発生した。当時、市会では士族層が多数を握っていたが、商人の進出、人口増加による平民層の増加によって、政費節減も含む市政刷新運動が始まった。1901年の市会半数改選では、水道敷設延期派が改選議席を独占した。その背景には、市政刷新への支持と経済不況による財政懸念があった。進歩党は消極主義によって市政の実権を把握した。この過程で、士族層は市政から退場していった。この事例から、岡山市では、水道敷設が利益誘導路線をとる自由党の支持拡大に寄与しなかったことが指摘される。また、政費節減を含む政界刷新論の論理が日露戦前に提示されており、これが日露戦後の都市部で発生した政界刷新論につながっていくと展望が示される。

第三章では、地方政治史において進歩党系の動向を観察した研究が少ないことを前提に、日露戦後に岡山県の進歩派支配が崩壊する様子が描かれる。

第一章の児島湾問題では反対派の中から事業に反対するだけでなく、地域振興を考え、インフラ整備を進めようとする民力休養路線ではない路線が生まれた。1899年以降の県会

は進歩派がリードしており、中央とは異なるという論理のもと、是々非々で積極政策を徐々に受け入れるようになっていた。当時の中央政界において犬養は、軍拡偏重を批判しつつも、運輸・教育・外交への支出を主張していた。

しかし、党外及び坂本金弥を中心とする党内少壮派から、犬養派古参県議に対し、県当局との癒着や、国税負担は批判するにもかかわらず、地方税負担増加を肯定しているという矛盾への批判が発生した。1904年の宇野湾築港問題を機に批判は爆発し、反対派県議は新倶楽部結成（1906年11月鶴鳴会として結成）へと動いた。犬養派古参県議も地元からの批判を受け、勢力回復のため、新倶楽部への参加を目論んだ。結果として1906年11月の県会では、民力休養路線で一致した。こうして、坂本は県会再編を成し遂げたことで、中央政界に進出した。この事例から、民力休養論が政界革新と組み合わせることが指摘される。1900年代の民力休養路線は、地方において幅広い政治運動を巻き込み、政治革新運動へとつながる射程を有したのであり、地方政治状況の展開を考えるうえで決して無視できないと言えよう。民力休養の基盤は都市のみならず、地方にも存在していたのである。

第四章では、国民主義的対外硬派の地方における基盤・広がり、地方に視点を当てた立憲国民党の成立について、岡山県において鶴鳴会が立憲国民党に発展的解消していく過程から論じられる。

岡山県においては、日露戦争を挟んで、紡績業が台頭したが、蘭筵業は伸び悩み、蘭筵業を基盤とする犬養派の地位が揺らいだ。さらに、坂本の設立した紡績会社が倉敷紡績に吸収されたことで、倉敷紡績関係者が坂本側に移った。この状況で、犬養派も鶴鳴会に加わるしかなくなった。一方、同時期、犬養は中央で消極主義から積極主義への「旗幟変更」を主導したが、失敗し、批判が集まっていた。すなわち、犬養は中央・地方で苦境に立っていた。

この状況に対し、犬養は1907年から1908年にかけて清国を視察したのち、「経済的軍備論」を提唱した。これは、軍事と経済のバランスを重視し、基本的に経済を主として軍備を従とする財政方針のもとで貿易立国化をめざす構想であった。当時、坂本は、閥族打破を中心とする政治革新論と消極的軍備と国内産業の興隆を主張していた。当時の典型的な民力休養論と言える。

「経済的軍備論」は、中央政界において、政府・政友会に対応でき、増税反対運動を牽引する政策論となった。岡山県内においては、坂本の構想と近くなり、犬養派と坂本派の提携余地が生まれた。そこで、憲政本党は民力休養路線へ回帰し、中央・地方で増税反対運動を推進することが可能になった。犬養は中央政界で坂本と協調し、党内抗争に勝利した。中央政界での協調を受けて、岡山でも協調が成立した。中央政界では立憲国民党が結成され、岡山では鶴鳴会が立憲国民党岡山支部に再編されたのである。すなわち、県基幹産業の意見を汲みとることの重要性が示されるとともに、犬養・坂本を接点として、岡山と中央は連動していることが露わになっている。

第二部では、犬養が政権参加を模索する過程においてどのような政治指導を行ったか説明される。

第一章では、日清戦後における犬養の国家構想の形成過程が検討される。犬養は議会開設前より、軍事より経済優先というスタンスを持っていたことは先行研究<sup>(3)</sup>でも指摘されており、著者もその考えを受け継いでいる。しかし、著者は、中国問題について、何らかの理想が存在し、その理想に基づいて行動していたという先行研究<sup>(4)</sup>の主張を否定し、具体的な構想は国内外の情勢変化に即して更新されていたと主張している。三国干渉の際、自由党・伊藤の接近によって、対外硬派連合は対外拡張主張を修正し、健全財政を唱える松方ら薩摩閥との接近を図ったが、その中心は犬養であった。第二次松方内閣成立以降、犬養は孫文などの革命派や戊戌の政変で亡命してきた康有為などの立憲派、東亜同文会への参加によって南方の地方官勢力など様々な人脈を得たが、それは犬養の理想ではなく、国内事情によって使い分けられた。そして、第二次松方内閣の瓦解以降は政府・自由党への対抗のために、近衛篤磨に急接近し、立憲政友会成立に対抗して、近衛の国民同盟会へ参画することで、憲政本党の党勢拡張を図った。しかし、日露緊張の緩和、伊藤内閣の総辞職によって国民同盟会の活動意義が低下すると、それをやめ、犬養は松方のような健全財政構想へと回帰したのである。

補章では、大手倶楽部に着目して、日清戦後に対外硬派勢力が薩摩閥に近づいていく過程が描かれる。大手倶楽部は1894年、関西・中国地方出身で、対外硬を推進した議員により結成された。新資料として、京都の名望家、稲葉一郎右衛門の残した稲葉家文書が利用される。

三国干渉を問責する議員らは戦後経営策を協議する臨時議会を要求しつつ、意見調整を行ったが、この過程で松方の財政主義に接近した。この背景には、関西の実業界中に国権を全面に出した世論喚起策が実業に支障をきたすと考える意見があったことが挙げられる。著者は、この実業界の事情は、進歩党の地盤を考える上で重要であり、問責派を批判する地方の声が問責派議員らを松方へと接近させる要因になったと主張する。戦後、対外硬派が自由党に対抗して政党の結成に動く大手倶楽部は解党し、一部は進歩党に参加した。対外硬派が結集した進歩党においては、後に大隈が積極・消極主義で逡巡したのと同様に、党内では、積極主義をとる者、消極主義をとる者の両者が併存し、対立していた。犬養はその対立を解消すべく、松方を参考にした政策を進めていく。

第二章では、国民党結成が犬養にとっていかなる意義を有したかが説明される。犬養は、1903年に、海軍拡張は必要ながら、冗費冗官の淘汰によって、民力休養を図る考えを提示した。中央での政権参画を意識しつつ、県下の民力休養路線と矛盾しないようにした。しかし、その考えは、満洲情勢緊迫によって破綻し、憲政本党では犬養らと対外的な反幹部層が対立した。この時、犬養は曖昧な態度を示していた。

日露戦争後、政権参画に失敗した幹部への批判が集まり、その後の議会での消極路線も

功をなさず、さらに批判が集まった。翌年には、岡山も積極路線に移行していたことで、「旗幟変更」を行ったが、これも功をなさず、第一部第四章で論じられたように岡山の地盤も揺らいだ。結局、犬養は、党内抗争で民力休養を前面に打ち出し、地方党員の支持を集めて、党内抗争に勝利した。この過程で、犬養が「民党主義政治家」であるというイメージと自己認識が生まれたこと、民力休養路線をもとに藩閥・政友会が汲みとりきれなかった社会的不満・現状打破要求を汲みとろうとしたことが指摘される。しかし、第一次護憲運動によって、犬養はその政治基盤を失い、反官僚・民党理念を保持し続ける「主義政党」という看板を前面に押し出すのであった。

第三章では、犬養の国家構想や政治動向と関連させつつ岡山県の国民党の動向を捉えることを通じて、国民党が民力休養路線のもと、大正前期の岡山で盤石な基盤を築き、第三党路線を維持する過程が描かれる。

岡山県の第一次護憲運動においては、義捐金募集運動が盛り上がったことが全国的にみると特異であるとされる。運動推進者たちは、かつて板垣退助らと対立し、先走りとして批判された自由民権運動とのつながりを自覚し、自らの運動の正統性を強調している。つまり、岡山の民権運動は孤立していたものの、国会開設運動の先駆者であったという自画像を創出していた。護憲運動後、犬養は、国民党はキャスティングボードを握る第三党であることを認識していたが、孤立し、苦闘していたのもまた事実であった。この犬養の孤立は、岡山県民にとって、自分たちの政治運動と重なって見えたと言及される。

また、坂本が第一次護憲運動後、桂新党へ参加し、失脚したのに対し、犬養が支持を得たのは、名望家のみならず、青年層への支持も広げていたためである。それは、青年の政治思想の涵養を訴える国民党と、政治意識を高揚させ、現状打破を期待する青年層が結びついたためであるとされている。

終章においては、これまでの本書の成果がまとめられた上で、1915年以降の犬養や進歩党系（同志会・立憲国民党）の展望が示される。

## 二 本書へのコメント

この本における成果は、大きく分けて2つあると言えよう。1つ目は、民力休養路線の行き先である。著者が述べる通り、先行研究<sup>6)</sup>においては、自由党・政友会による利益誘導が行われるにつれて、民力休養路線は都市部へと移動していくということになっている。しかし、著者は岡山県の情勢を通じて、その主張に反論する。岡山県、特に南部においては、利益誘導が機能しておらず、政治刷新という考えと相まって、商工業者は民力休養を支持している。ここから、都市部のみならず、地方においても利益誘導路線が機能せず、民力休養路線が広がっていたのではないかと提起する。本書においては、岡山県の、主に南部の事例しか扱われていないが、重要な示唆である。

2 つ目は、犬養毅をどう評価するかという点である。著者が行った「犬養の政治指導を選挙地盤・政治基盤との関わりを踏まえて描きだす」(1 頁)という作業は犬養に関する研究において新しいものである。著者が序章に書く通り、犬養に関する研究書は既に何冊か存在する。しかし、これまでの研究は、犬養の中央での工作、政策に着目したものばかりであった<sup>6)</sup>。犬養は衆議院に議席を保有する政党政治家である以上、地元の支持がなければ中央での活動はおぼつかない。言われれば当たり前であるが、第 1 回総選挙から生前最後の第 18 回総選挙まで落選したことがなかったという経緯からだろうか、地元の基盤は強固であることがもはや前提となっており、何らの検討もなかった。地元の基盤への着目という点、山陽新聞や地元支持者への書簡から犬養の意見や認識を見出そうというのが大多数であったと言える。しかし、著者はここにメスを入れた。犬養の政治基盤は最初から盤石なものが存在していたのではなく、徐々に作り上げられたものであることを証明した。その上で、犬養の 1890 年から 1915 年にかけての中央の動きは岡山の情勢を無視したものではなく、中央と岡山が連動していることを示したのである。

以上のような大きな成果をふまえた上で、若干の論点を指摘していきたい。

第一章の児島湾問題(三 児島湾開墾問題をめぐる進歩派の動向)をまとめると、進歩党系は民力休養路線を維持し続けたからこそ、中央が積極主義に転じたのに倣って途中で賛成に転じて支持を失った自由党系と異なり、周辺住民の「生活」を汲みとり続け、勢力を得たということになる。大正デモクラシーのキーワード「生活」にも結びついたと著者は指摘する。

注意しなければならないのは、民力休養とは、税金負担の軽減を指すことが多いということである。この節においては、利益誘導が「生活破壊」であることは説明されるが、第三章の宇野湾問題と異なり、児島湾問題においてはその費用・課される税金について検討された形跡が見られない。児島湾問題は、生活問題と開墾決定過程への疑念が結びついたものであり、引用史料も「民権ノ運動」(41 頁など)と表現している。住民の主張は、政治参加要求と言えそうな、簡単に言えば、県当局に対して自分たちの主張を聞けというものであろう。確かに、民力休養も「民権ノ運動」も藩閥への批判という点では通底しており、後に、民力休養が国益に対して「生活」を重視した論理となっていくという指摘は興味深い。しかし、児島湾問題では、税金負担の軽減という意味での民力休養が前面に押し出されたわけではないため、よく知られる民力休養とはやや異なる意味合いを持っているのではないかと評者は考えている。

第二章は犬養の名が全くと言って良いほど出てこないという点で、この本の題名に照らし合わせると特異な章である。議論の前提として、犬養の選挙区を確認しておきたい。犬養は庭瀬藩に生まれ、出身地を選挙基盤とした。1889 年の町村制施行後は賀陽郡庭瀬村、1900 年の郡制施行後は吉備郡庭瀬村(翌年町制施行)である。岡山市に編入されたのは戦後である。犬養の選挙区は第 1 回から第 6 回(1898 年)総選挙まで岡山 3 区<sup>7)</sup>、第 7 回

(1902年8月) から13回までは岡山郡部であった。すなわち、第二章で論じられている時期(1900年から1902年)に、問題となっている岡山市が犬養の選挙区になったことはない。また、水道敷設に関し、当局・賛成派と反対派が妥協した(1902年5月)直後の第7回総選挙において、岡山市部から当選したのは、立憲政友会の石黒涵一郎であった。

ここで取り上げたいのは、著者が第一部で強調する民力休養路線の広がり方である。民力休養路線が支持を集めていることについては緻密な実証がなされているが、それが全国的に広がりを見せることについては、それを示唆するという形で終わっている。広がりというワードに着目して生じてくる論点は2つある。1点目として、岡山市の水道の事案によって生じた民力休養＝政治刷新という路線は、隣接する犬養の地盤まで波及したのか(地域的な広がり)、2点目として、同時期の国政選挙において、岡山市民はなぜ、立憲政友会の候補者を当選させたのか(市内における地方選挙の結果は国政選挙に波及するのか)、というものである。

特に、1点目については、児島湾問題と比較してみたい。児島湾問題においては、犬養の動きは確認できないものの、児島湾周辺の都宇郡、窪屋郡は反対運動の中心地域であること、反対運動は県全域で盛り上がったことが指摘されている。この動きは県内の進歩派の伸長、民力休養路線の基盤を強固としたことは間違いないと言えよう。一方、水道敷設の過程で岡山市において進歩派が伸長したことは著者の実証を見るに間違いないが、その岡山市における進歩派の伸長が犬養の地盤及び犬養にどのような影響を与えたのかということは何ら議論されていない。第一部第二章は副題が「岡山市の場合」となっているので、あえて書かなかったのかもしれないが、この本に入れるのなら、岡山市の事例が岡山県全体において、どのように位置付けられるかも示すべきではなかったのかと考えられる。

一方、著者が明示的に言及しているわけではないが、検討しなすなければならない通説も存在する。第二部からは、犬養の対外政策は国内外の状況に応じて更新されていくものであり、何らかの理想があったものではないということが示唆される。犬養は極めて現実的な政治家であるという像が提示されている。一方、思想史の立場からは、犬養は、アジアを団結させ欧米に対抗しようという理想をもつアジア主義者であると捉えられることが多い。一般書はともかく、犬養が孫文などの革命派を支援し続けたとする研究書は皆無であり、革命派よりも康有為ら立憲派を重視している時期もあったことは既に知られている。それは前提とされた上で、日支提携論を唱えている時期の存在、中国のみならずベトナムなどアジア各国から亡命者を受け入れているという事実を捉え、アジア全域を支援して、欧米に対抗しようという理想をもったアジア主義者であるという評価がなされてきたのである。題名からして、中国を除く外国への目線や先述の亡命者への対応は本書の射程外である。しかし、犬養の先述の対応を犬養が持つとされる欧米対抗論から検討して良いのか、欧米への対抗を掲げる犬養像は虚像ではないのか、が問題とならざるを得ない。これからの課題と言えよう。

## 注

- (1) 嚆矢として、坂野潤治『明治憲法体制の確立——富国強兵と民力休養』（東京大学出版会、1971年）。
- (2) 松本洋幸『近代水道の政治史——明治初期から戦後復興期まで』（吉田書店、2020年）。
- (3) 時任英人「犬養毅における「平和」外交と軍縮について」（『倉敷芸術科学大学紀要』19号、2014年、117-119頁）。
- (4) 先行研究の到達点として、時任英人『明治期の犬養毅』（芙蓉書房出版、1996年）があげられる。
- (5) 坂野、前掲書。
- (6) ・ Joseph Lee Sutton, *A Political Biography of Inukai Tsuyoshi* (University of Michigan, Ph. D. dissertation, 1954)  
・ 岡義武「挫折の政治家・犬養毅」（『近代日本の政治家』岩波書店、1960年）。  
・ 今井清一「犬養毅」（遠山茂樹編『近代日本の政治家——二十世紀を動かした人々』第10巻、講談社、1964年）  
・ 小山博也「政党政治家の思考様式——犬養の場合」（篠原一・三谷太一郎編『近代日本の政治指導』東京大学出版会、1965年）  
・ 木坂順一郎「政党政治家の思想と行動（1）——犬養毅の場合」（『龍谷大学経済学論集』5巻4号、1966年）  
・ テツオ・ナジタ「犬養毅——第二次世界大戦前の日本における政党発展のディレンマ」（『日米フォーラム』15巻10号、1969年）  
・ 時任英人『犬養毅——リベラリズムとナショナリズムの相剋』（論創社、1991年）。  
・ 同『明治期の犬養毅』  
・ 小林惟司『犬養毅——党派に殉ぜず、国家に殉ず』（ミネルヴァ書房、2009年）  
・ 五百旗頭薫「犬養毅——野党指導者の奇遇」（筒井清忠編『昭和史講義 3 リーダーを通して見る戦争への道』筑摩書房、2017年）  
・ 同「野党存続の条件」（『嘘』の政治史——生真面目な社会の不真面目な政治』中央公論新社、2020年、初出2014年）  
などが挙げられている。
- (7) 岡山3区は都宇郡、窪屋郡、賀陽郡、下道郡で構成される。賀陽郡は犬養の出身地である庭瀬村（町）が含まれる。都宇郡、窪屋郡は児島湾問題において開墾反対運動が行われた地域である。